

# 第三次世界大戦 1

太平洋発火

大石英司

*Eiji Oishi*

## 立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

### ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

插  
画  
安  
田  
忠  
幸

## 目次

プロローグ	11
第一章 ロデオドライブ	19
第二章 シアトル暴動	40
第三章 サイバー攻撃	66
第四章 <small>イーゲル・ワース</small> 鷲の憤怒 作戦	96
第五章 帰国命令	123
第六章 リヤド騒乱	149
第七章 クイック・マニユアル	175
第八章 ミスチーフ礁沖海戦	199

# 登場人物紹介

## 日本

### 《防衛省》

#### 〈特殊部隊サイレント・コア〉

どもんこうへい  
土門康平 一佐。ようやく昇進したことで、浮かれ気味。部下には辟易とされている。

#### 〔原田小隊〕

はらだたくみ  
原田拓海 一尉。元は小牧基地の教育隊所属の救難教育隊救難指導員。土門に一本釣りされ小隊長に任命される。コードネーム：K2。

はたけともゆき  
畑友之 曹長。分隊長。冬戦教からの復帰組。コードネーム：ファーム。

たかやまけん  
高山健 一曹。分隊長。西方普連からの復帰組。コードネーム：ヘルスケア。

おおしろまさひこ  
大城雅彦 一曹。土門の片腕として活躍。コードネーム：キャッスル。

まちだはるお  
待田晴郎 一曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

みずのともお  
水野智雄 一曹。元水泳の強化選手。分隊長に出世した。コードネーム：フィッシュ。

たぐちしんた  
田口芯太 二曹。部隊随一の狙撃手。コードネーム：リザード。

ひがひろみ  
比嘉博実 三曹。ドンパチ好きのオキナワン。田口の「相方」を自称。コードネーム：ヤンバル。

あづまだいき  
吾妻大樹 三曹。山登りが人生だという男。コードネーム：アイガー。

#### 〔姜小隊〕

かんあやか  
姜彩夏 三佐。元は韓国陸軍参謀本部作戦二課に所属。司馬に目を付けられ、日本人と結婚したことで、部隊に引っ張られる。コードネーム：マカルー。

うるしぼらたけとみ  
漆原武富 曹長。姜小隊ナンバー2。コードネーム：バレル。

ふくとめだん  
福留弾 一曹。鹿児島県出身で、部隊のまとめ役。コードネーム：チェスト。

いいかける  
井伊翔 一曹。姜小隊のITエンジニア。コードネーム：リベット。

みどうそうま  
御堂走馬 二曹。元マラソン・ランナー。コードネーム：シューズ。

あねこうじ さねあつ  
姉小路実篤 二曹。父親はロシアビジネス界の大物。コードネーム：ボーンズ。

かわにしまさふみ

川西雅文 三曹。元Jリーガー。コードネーム：キック。

ゆらしんじ

由良慎司 三曹。西方普連から引き抜かれた狙撃兵。コードネーム：ニードル。

おだぎりしろう

小田桐将 三曹。タガログ語を話せる。コードネーム：ベビーフェイス。

あびるあきら

阿比留憲 三曹。対馬出身。西方普連から修業にきた。コードネーム：ダック。

あかばねたくま

赤羽拓真 士長。フィールドでのゲテモノ食いに長ける。コードネーム：シェフ。

### 〔訓練小隊〕

あまりひろし

甘利宏 一曹。元は海自のメディック。生徒隊時代の原田拓海一尉の同期。

### 〈陸上自衛隊 西部方面普通科連隊 (WAiR)〉

しばひかる

司馬光 二佐。西方普通科連隊付き教官。朝霞で婦人自衛官の教育に当たれば一佐に昇進させてやると言われているのだが……。

### 〈第一ヘリコプター団〉

きたぎとみのる

北郷稔 陸将補。

かどくらしげのぶ

角倉重信 一佐。高級幕僚。

いそがいたくや

磯貝拓也 一佐。副団長。

むらたもりと

村田護人 三佐。村田家次男。

むらたりんこ

村田凜子 一尉。村田護人の妹。明野で偵察ヘリに乗っていた。

### 《海上自衛隊》

#### 〔海上幕僚監部〕

うえすぎしんご

上杉慎吾 海将。海上幕僚長。

#### 〔航空集団〕

ねぎまさはる

根木雅晴 海将。航空集団司令官。

おかだやすし

岡田靖 海将補。航空集団幕僚長。

#### 〔南支派遣艦隊〕

たかとおまさや

高遠雅也 海将補。南支派遣艦隊司令を務める。

そめやとしお

染谷俊雄 一佐。首席幕僚。

ばんどうかおと

板東兼人 一佐。“かが”艦長。

かわさか

兼坂すみれ 二佐。艦隊情報幕僚。

### 〔第七航空隊〕

ふじわら みさ  
藤原美沙 二佐。岩国基地第九一航空隊司令。回転翼パイロットとしてスタートし、後に双発に転じ、海自初のジェットであるU-36 Aのライセンスももつ。

まじまけい こ  
真島恵子 二佐。整備中隊を率いる。

くまかわたかし  
隈川隆 三佐。第七飛行隊副司令。

## //// アメリカ //////////////////////////////////////

### 《アメリカ合衆国大統領行政府》

エリザベス・ケンジントン 大統領。

ケイティ・ヘンドリクセン 国務長官。

コリン・コンラッド 大統領首席補佐官。アマンダ・マクノートンの上司。

アマンダ・マクノートン 新補佐官。安全保障問題担当次席補佐官から国家安全保障問題大統領補佐官へ就任。

クインシー・ショー ホワイトハウス広報室長。

### 〈空軍〉

#### 〔第一三爆撃飛行隊〕

ケンドル・マコーミック 空軍中佐。第一三爆撃飛行隊を率いる。

マシュー・クック 少佐。副隊長。

アンディ・マルチネス 大尉。副操縦士。

シンディ・ガリクソン 大尉。部隊で一番若い。

ウンベルト・ゲパート 大尉。パイロット。

トッド・ラティーノ 曹長。機付き長。

トム・ハワード IT長者。大統領の西海岸での最大の支援者。“ドラゴン・スカル”の湯国慶襲撃に巻き込まれ、娘が即死、妻は脊髄を損傷し半身不随となった。

## 中国

### 《中央弁公庁》

ファンシュエマオ  
範 学毛 中国共産党中央弁公庁主任。

### 〈陸軍〉

ウェイリイシイ  
章 立新 少将。

ロンブワンフエイ  
龍 鵬 飛 少佐。世界の奇襲戦法が専門。日本のアニメオタク。

### 〔第一〇八特別監察旅団〕

ウビン リンカン  
武 彬 林剛の元上官。彼をスカウトしにきた。

タオ ツ モ  
陶 子默 一級軍士長。

リンカン  
林 剛 元少佐。ふたりの子供がいる。石炭をアパートへと運ぶ仕事をしながら生活をしている。



第三次世界大戦 1 太平洋発火

平和主義者。彼らが暴力を放棄できるのは、他の人間が彼らに代わって暴力を行使してくれるからだ

—— ジョージ・オーウェル

## プロローグ

花火のドーン！ という重い音が響く中、爆竹の忙しない音も近くから聞こえてきた。党は長らく爆竹の類を禁じていたが、この辺りではお構いなしだ。

時折、人々の喧噪も路地裏まで響いてくる。

林剛はベッドの端に腰を下ろすと、真っ黒に汚れた両手で頭を抱えた。

アパートの下に子供たちの自転車は無かった。

きつと、兄妹で祭り見物に出かけたのだろう。金を持っていないはずなので、悪さをしなければいいがと思つた。

足音が響いたので、腰を上げてドアを開けなが

ら「こんな時間に——」と言いかけて息を飲む。

うす暗い階段を上つてきたのは、二人の子供たちではなく、高そうなジャンパーを着込んだ男——武彬が「やあ、同志」と階段の下から呼びかけてきた。そして懐かしそうに微笑む。

林は昔の習い性で、踵を揃えて敬礼しようとしたが、武は「こんなところで、よしてくれ」と制してきた。

「少し話したい。入っていいかな？」

「狭くて、椅子もありませんが……」

「構わんよ。床に座るさ」

武はそう言うと、部屋に入り視線を一周させた。

林の狭い部屋は、三分の二をベッドが占領している。折り畳まれたテーブル、流しにトイレ。その隣が物置だ。もちろんシャワーの類は無い。

武が、言葉通り床に腰を下ろして胡座を組む。

林は窓際に立ったままだった。

「君を探すために、半年もかかったよ。この国の戸籍制度もいい加減なものだな。……奥さんが亡くなったことを聞いた。お悔やみを言うよ。誤診だったそうだね」

「病院を訴えようにも、病院に常駐していた警官が、妻の遺体を持ち去って、それっきりです。どこに捨てられたのかも、わからず仕舞いで」

「知っている。病院が医療過誤で訴えられるのを防ぐために、バイトで雇われた警官が片っ端から死人を誘拐して、どこかに捨てにくんだらう？ 酷い話だ。この国は、上も下も腐りきっている」

「自分には、もう関係無いことです。息子たちを

喰わせなきゃならない」

「今は、どんな仕事を？」

「アパートに、暖房用の石炭を運んでいます。稼

ぎは、たいしたことはありませんが……」

「お子さんは、学校には通えていないんだらう」

「ええ、まあ。公立は、金がかかりますから」

「変な国になってしまったな。医療と教育が無料なのが取り柄の共産主義国で、四千万もの子供たちが公立学校に通えずにいるなんて。しかし君なら、警備会社などへの就職の口があったんじゃないか？」

「もう制服を着る仕事はご免です。懲りました」

「まあ。あの頃の私は非力で、君を助けてやれなかった。だが、今は違う。私のところに来ないか？ 生活は保障できる。私立だが、無料で子供たちに最高の教育も受けさせてやれる」

「それは、民間軍事会社とかですか？」

「それに近いが、ちよつと違う。この国はもう駄目だ。党も国も、国民も腐りきつてゐる。いずれ瓦解するだろう。一党独裁もな。だがそれでも、国家は永續する。中国という国家を永續させるために立ち上がった人々がいる。党の要人であり、大企業のオーナーであり、われわれ軍人だ。再生委員会」という集まりを作り、国が破綻する日に備えている。もちろん、国が崩壊することを防いでいるわけだが。その委員会の活動を少しでも広げて、賛同者を募っている最中だ。政府の中の政府と、言つてもいい」

「……雲を掴むような話だ」

「まあ、最初はな。はじめた頃は、正直、私も疑つたよ。本当に、党の了解を得ている活動なのか。本当に、資金は出てくるのか。だが、賛同者は年々増え続け、資金も潤沢に流れている。私の部隊も日々大きくなり、更に優秀な部下が必要

になった。——数百人の兵士を統率できる人間が必要だ。恫喝や賄賂ではなく、知性と品格で、部下を引っ張れるような士官を必要としている」

「……子供たちが、そろそろ帰ってきます」

武は、床に散らかったカップ麺の容器に視線を落とした。

「林剛！ こんな生活をしていちゃ駄目だ。奥さんだって、望まないだろう。私と共に来い!! 自分や党、国家のためではなく、子供たちのためだと割り切れればいい。それなら、君のプライドも傷つかない。明日から、子供に三食、まともな食事を与えられるんだぞ。ノートと鉛筆を与え、きちんとした勉強もさせられる。暖房が入った綺麗な教室でな。……選択の余地はないぞ。君のプライドのために、得られる待遇を捨て、子供の未来を奪う権利はないのだから」

外で階段をバタバタと駆け上がる音が聞こえる。

子供たちの声もした。

荒々しくドアが開くと、武は「よう、坊主たち。帰ってきたか！　上が浩然君で、女の子が欣怡ちゃんだな」と笑顔で振り返った。

「腹が減っているだろう？　お父さんとみんなで、飯を食いにいかないか？」

「どこの屋台？　下に止まっていた格好良い車、おじさんが乗ってきたの!!　ボディガードが、一杯いたよ」

「ああ、そうだ。君たちを守るためにボディガードを連れてきた。一緒に乗ってみるか？　屋台も良いが、ツァンティン 餐厅（レストラン）に行ってみないか？」

「餐厅って何？　イェンイ 夜市（屋台）に行こうよ」

下の子が兄にせがんだ。  
「そうかあ。欣怡ちゃんは、ツァンティン 餐厅には行ったことないか」

「俺も、ないです」

上の子も言う。

「じゃあ、決まりだな。餐厅に行こう。好きなものを、何でも食べられるぞ！」

武は腰を上げると、子供たちと一緒にさつさと階段を降りていった。やむなく、林も下へと降りる。

アパートの玄関では、見知った男が待っていた。  
「……陶子タオツモ黙一級軍士長」

「やつと探し当てました、少佐」

と相手が敬礼した。

「奥様のこと、お気の毒でした。女房がお世話になりましたのに」

「うん、ありがとう」

狭い路地裏を抜けたところに、その路地を塞ぐような格好で黒塗りのドイツ車が止まっていた。その後ろには、警備を乗せているらしいワゴンも

いる。

車の周囲には、黒いジャンパーを着て、耳にイヤホンを付けた男たちも見えた。

「あの人は、今でもこんな警護が必要なほど、敵がいるのかね？」

「はい。この半年間だけでも、電話一本で自分より階級が上の将官を五〇人以上クビにしたり、軍務所に送り込みました。それはもう、敵だらけですよ。専用車が銃撃されたことも、一度や二度ではありません」

「……声をかけたい連中がいるんだが、応じてもらえるかな」

「問題ありません。ただ、少佐殿が連れてきたいと思われる連中は、すでにあらかた部隊に戻っているはずですよ。少佐だけが、長らく消息不明でしたので」

「すまないな。何もかもが、嫌になってね」

「この国は、もう長くはもたないでしょう。あの人は、その日に備えているんです。われわれの出番がこないことを祈っていますが、少佐のようなベテランが側で支えてくだされば、われわれ下士官も安心できます」

「世捨て人暮らしも、今日で終わりだな」

「ええ、是非！ 明日からは、毎朝糊ののきいた軍服に袖そでを通し、髭ひげを剃そる生活に戻ってください。きつと奥様も、それを望んでいらっしやいます」

子供たちは、はしゃぎながらドイツ車の後部座席に消えていった。

遠くで爆竹が鳴り、警護兵たちが少し身構える。

——嵐になる。

林剛は、腹をくくりながら、そう考えた。

その日も、ビバリーヒルズの高級ブティック街

は、大勢の観光客と、資本主義社会で勝利を収めることのできた一握りの買ひ物客、そしてハリウッド・スターを張り込むパラッチ集団で賑わっていた。

快晴の空が心地好い昼下がり。そんな超高級なブティック街で、パン！ という銃声が鳴り響いた瞬間、真っ先に反応したのはパラッチたちだった。

蛇蝎のように嫌われている彼らは、だがその一発の銃声から、いっばしの戦場カメラマンへと変身した。

銃声が見定めると、仲間同士で確認を取り合い、異変に気付くこともなく楽しげに写真を撮り合う観光客らに「逃げろ！ 逃げろ!!」と叫ぶ。そして、建物伝いに銃声が見え方角へとにじり寄りとした。それぞれ、三〇〇ミリから四〇〇ミリの超望遠カメラを構えながら。

そのカメラに、一軒のブティックから、誰かが路上に飛び出してくるのが映し出される。

東洋系の顔付きで、頭部には僅かに白髪が交じる壮年の男性だ。アジア系にしては背丈は高い。

一八〇センチほどだろうか。

目立たない地味な色合いのポロシャツを着ている。だが、灰色のゴルフズボンの腰の辺りが、鮮血に染まっていた。

アジア系の男たちも数人飛び出てくる。

一人目は、建物の中へと自動拳銃を連射しながら後ろ向きに出てきたが、たちまち室内からの銃撃で蜂の巣にされた。くぐもった発砲音が響いてくるが、明らかに自動小銃か、サブ・マシンガンの連射音だ。

次に右手に銃を握り店から出てきた男は、先に死んだ男のようなミスは犯さなかった。二発を建物内に撃ち込むと、一目散に壁の陰へとジャンプ

して、路地裏へと走り去っていった。

最初に飛び出してきた壮年の男は、路上にとめられた黒塗りのエクスペローラーの運転席のドアを開けようとするが、彼を追って店の中から出た男が、サブ・マシンガンを乱射してとどめを刺した。

血糊が路上に飛び、有名ブティックの大石の壁を赤く染める。車のタイヤにも弾が当たり、プシューと空気が抜ける音がした。

店内から飛び出してきた目出し帽を被った集団は、銃口を水平に持つと、泣き叫ぶ観光客を威圧しながら、走り込んできたワゴンに飛び乗ろうとした。

ところが彼らは、ここが観光地だという認識が薄かったらしい。

ワゴンが近付こうとすると、制服の警官が銃を抜いて、そのワゴンの運転席を狙い発砲した。運

転手も、目出し帽を被っていたからだ。

ワゴンは、そのブティックの三〇メートルほど手前で、道路を挟んで反対側のブティックの玄関に突っ込んで止まる。

警官は、あつという間に二人、三人に増え、ブティック沿いに移動しようとした覆面集団との間で、激しい銃撃戦となった。

警官が一人倒れたが、目出し帽の男の一人も太股ももに銃弾を浴びて倒れる。

やむなくその集団は、元いたブティックへと逃げ戻り、立て籠もった。

警官の数はさらに増え、そのブティックをワン・ブロックごと包囲するまで三分とかからず、サプレッサー付きのH&k-416DやMP7を装備するロスアンゼルス市警察のK-9部隊が到着する頃には、周辺三ブロックにわたり、街ごと包囲されていた。

ロスアンゼルス市警察は装甲車でブティックに接近し、まず投降を呼びかけたが、相手は応じない。

高級ブティックは、ショーケースこそ綺麗に飾り立ててあったが、店の性格上、防犯は完璧で、一度立て籠もられると外から容易に破壊はできない構造になっている。ショーケースを破壊したところで、その奥の壁は鋼鉄製だ。

たった一箇所の入り口は、これも鋼鉄製の観音開きのドアだった。

集音マイクで、店内の客が負傷していることを知ったK-9部隊は、説得で時間を稼ぎつつ、プラスチック爆弾でドアの蝶番を破壊し、一気に解決を図る。

K-9部隊が現場に到着してから、店内を制圧するまで二〇分とかからなかった。

メディアの現場中継こそ無かったが、警官隊が

周囲を包囲してパパラッチを締め出すまで、彼らが撮影した動画が、その後、繰り返しテレビで流されることになる。

それが、この後に起こる、世界大戦の切っかけになると予測した人間は、まだいなかった。

## 第一章 ロデオドライブ

アメリカ合衆国大統領府・安全保障問題担当次席補佐官のアマンダ・マクノートンは、パリのアメリカ大使館にいた。

どつぽにはまった中東情勢を巡るEUとの特別協議のお膳立てで、国務省の高官らと共に赴いたのだ。夕方には終えているはずの会議は夜になっても続き、サンドウィッチとピザを食べながらの協議が終わったのは二二時だった。

それから一時間半、国務省との打ち合わせがあり、その後ようやく大使館側が用意してくれた部屋へ引き揚げようとしていた。

パリ観光など、叶わなかった。ホテルもフラン

ス料理も、何もなし。

国務省専用機でル・ブルジェ空港に到着した後は、パリ警察が差し向けた装甲車に乗り込み、大使館へ直行した。会議が終わるまでの三日間、大使館に缶詰だ。

だがシャワーがある分、マシなのだろう。贅沢は言えない。パリではテロが吹き荒れており、アメリカ人はもとより、大使館も格好のターゲットになっているのだ。

大使館職員が皮肉を込めて「スイート・ルーム」と名付けたらしいその部屋は、壁が薄く、シングルベッド横のスペースには、スーツケースを

広げる空間も無い。

アマンダが上着をハンガーにかけ、スカート  
ジッパーに指をかけたところで、コンビネーショ  
ン・デスクの上に置きっぱなしだった私物のアイ  
フォンが、ブルブルと震動しているのに気付く。

画面には、LAタイムズの馴染みの記者の顔写  
真が出ていた。ベッドに腰を下ろしながら、電話  
に出る。

「テッド、貴方から奇襲攻撃を食らうような要件  
って、何かあったかしら？」

「三度もかけたんだぞ！ オフィスに電話したら、  
取り継ぐの一点張りで、時間を無駄にした」

「私は今パリにいて、こっちはもう日付けが変わ  
る時間帯なのよ。もう、くたくたよ。こんな旧石  
器時代の連中は、滅びればいいわ」

「知っている！ うちの国際面の記者から、君が  
北米にいないと聞いた。むしろ、幸いだった。こ

の災難を、処理せずに済む」

「災難……？」

「テレビを点ける。CNNで流しているはずだ」  
壁に、二三インチのモニターがかかっている。

電源を入れ、CNNを探すのにしばらく手間取っ  
た。

「ロスで銃撃戦があつて、K-9部隊が出動し  
た」

「銃撃戦なんて、珍しくもないでしょう。K-9  
って、警察犬のこと？」

「LAPDのK-9部隊は、君がイメージする警  
察大部隊とはまるで違う。とんでもなく、重武装  
だ。犯人が一人逃げたという情報があつて、K-  
9が出動したらしい。その一人はまだ見つかつて  
いないが……」

やっとCNNが映った。パラッチが撮影した  
らしい銃撃戦の様子が、くり返されている。ロデ

オドライブとテロップがあった。

「チャイニーズ・マフィア同士の抗争とか言っているけど？ だとしたら、私の担当じゃないわ」

「違う違う！ それは、LAPDが逃亡犯を油断させるために、時間稼ぎで流した偽情報だ。そのブティックで買物していたのは湯国慶タンクワオチンで、彼を追いかけて店内に押し入ったのは、中国政府が派遣した『ドラゴン・スカル』だよ」

湯国慶という名前は咄嗟に思い出せなかったが、『ドラゴン・スカル』の名前はよく覚えていた。中国政府の特殊部隊で、アメリカ国内へ逃げた政府や党要人の拉致奪還を任務としている。

半年前、大物脱税犯を追いかけている時に交通事故を起こし、巻き添えで一般市民が死亡した。その件があつてから、議会で大統領が追求を受けている。

外国の特殊部隊が、米国内で暗躍あんやくしている不都

合な事実が、明るみに出た瞬間だった。

アマンドは、そこでようやく湯国慶の名前も思い出した。『ドラゴン・スカル』の、最重要ターゲットだった男だ。

「ああ、最悪だわ……！」

「いや、最悪なのはこの続きだ。『ドラゴン・スカル』が暴れたのは、とある高級洋品店で、そこは、店内で客の採寸を行つてから、有名デザイナーに服を作らせている。子供服からドレスまでね。そして、当日その店にいたのは、湯国慶だけじゃない。まだ名前は公になっていないが、VIPがいたんだ。——いいか、これは貸しだぞ」

「わかつているわよ」

アマンドはペンを取った。「店内には、トム・ハーワードの奥さんと五歳になる娘がいたらしい。誕生日パーティ用のドレスを、親子で作りにきていた。娘は即死。母親は今手術

中だ。探りを入れてみたが、この情報は、まだホワイトハウスには届いていない。だが、そろそろパパラッチが嗅ぎつけるだろう。何しろ、ロデオドライブでの惨劇だからな」

「トム・ハワードって……」

「IT長者だ！ 大統領の西海岸での最大の支援者だぞ」

「嘘……。あの、ハワード、なの？」

「君の首は、大丈夫だろうな」

「さあ、どうかしら。……ご免なさい、テッド。」

また、かけ直すわ」

「アマンダ、うまく立ち回れよ。でないと、竜巻に突っ込んだ間抜けな鳩みたいに、八つ裂きにされるぞ!!」

電話を切ると、アマンダはしばらく茫然としてため息を漏らした。

湯国慶、湯国慶……と、口の中で何度もくり返

す。

彼の処遇は、長らく頭痛の種だったのだ。

あの疫病神に最も寛容だった者から、首が飛ぶことになる。

アマンダは、蹴破るような勢いで部屋を飛び出すと、大使館中に響き渡るような大声で「ボスへの秘話回線を開いて！ 今すぐに!! そしてあたしを一分でも早く、DCに戻す飛行機を用意して！」と叫んだ。

トム・ハワードの妻娘が銃撃戦に巻き込まれ、娘が死亡したらしいというニュースが流れたのは、東部時間で暗くなってからだった。

そして、それから一時間もしないうちに、スクープ合戦が始され、それはまた同時に、ワシントンDCでの官僚や大統領側近たちの保身合戦に発展し、立ちどころに事件のアウトラインが明ら

かになった。

アメリカ本土で暗躍していた中国政府の秘密部隊が、これまたアメリカ政府が匿<sup>かくま</sup>っていた中国の脱税犯を捕縛する際に銃撃戦に発展、善良なアメリカ市民が再び巻き添えになった、と。

そして国務省とCIA、FBI、ホワイトハウスは、互いに責任を擦り合いながら、夜を明かしたのだ。

後に、ワシントンの消息筋はこの夜のことを、アメリカの政治史で「最も醜<sup>しゅうあく</sup>悪な夜」と呼んだ。

国務省専用機で離陸したアマンダ・マクノートンは、まるで朝日に追いかけられるように大西洋を飛び、夜明け前にアンダーソン空軍基地に到着した。そのまま専用車でホワイトハウスに入ると、イースト・ウイングの大統領首席補佐官であるコリン・コンラッドの部屋へと直行する。

コリンが、彼女の上司だ。デスクにつくコンラッドは一睡<sup>いっすい</sup>もしていないらしく、アームチェアに深く腰を下ろした状態で、近くに寄るよう視線で命じた。額<sup>ひたい</sup>に刻<sup>き</sup>まれた深い皺<sup>しわ</sup>は、苦悩と疲労を滲<sup>にじ</sup>ませている。

「君が昨夜電話をくれた時、大統領はどこにいたと思う？ よりにもよって、中国大使館主催の投資キャンペーンのパーティで、スピーチをしていた。せめてもう二〇分早くニュースが伝われば、大統領が五星紅旗<sup>ごせいこうき</sup>をバックに、和やかに話<sup>な</sup>しはじめることを阻止できただろうがな。テレビは、昨夜からこれみよがしに事件を伝える報道のバックに、あの場面を使っている。だが、まあ……あの会場で、記者に突撃されるよりは良かったです。スピーチが終わった直後、第一報を大統領の耳に入れることができたので、それ以上の惨劇は避けられたよ。昨夜のうちに、ハワード氏の秘書に、大

統領がお悔やみと、お見舞いのメッセージを伝えられた」

アマンダは、デスクの前の椅子に腰を下ろす。デスクに届いたばかりの今朝の朝刊が広げられていた。どれも、刺激的な内容だった。もちろん全紙が第一面だ。

「なぜ？ アメリカに他国の法執行機関が」とUSAトゥデイが書いている。ワシントンポストは、「大統領再選に暗雲」とあった。

「奥様のご様態は、どうなのですか？」  
「娘を庇<sup>かば</sup>って三発喰らい、一発が脊髄<sup>せきずい</sup>を掠<sup>かす</sup>めた。

命は取り留めたが、しばらくは車椅子生活。立つて歩けるかどうかは運次第らしい。奥様は慈善家<sup>じぜんか</sup>として、政界にもハリウッドにも友人が多い」

「北京からは、何か言ってきましたか？」

「一応、非公式には、遺憾<sup>いっかん</sup>の意の表明があった。一人逃<sup>にげ</sup>げているが、それは湯国慶の秘書兼ドライ

バーらしい。捜査はFBIが主導している。それで、君が以前、私に遣<sup>や</sup>したメモを昨夜読み返してみた。湯国慶を巡り、われわれが話し合った際のメモもな。君の判断が、正しかった」

アマンダは、ほっとため息を漏らした。それとわかるように、はつきりと。

「言うまでもないが、人柱<sup>ひとばしら</sup>が必要だ。誰かに責任を取らせ、生け贄<sup>にえ</sup>の子羊としてマスコミの檻<sup>おり</sup>の中に放り込まなきゃならん。誰がいいと思う？」

「私も当事者の一人です。固有名詞を出す資格はありません」

「君が大西洋上空にいる頃、議会筋の重鎮<sup>じゅうちん</sup>と何人か話し合い、彼らの見解も聞いてみた。マーク・タッカーしかいないだろうと、皆意見が一致した」

「私に同意を求めないでください。確かに、彼は私の意見を退けましたが、私が彼の立場でもそう

したかもしれないですし」

「問題は、そこではない。これはもう、決定事項だ。すでに何カ所かにリークした。問題は後任人事だ。元々、私は君のことを国家安全保障問題担当大統領補佐官に推薦すいせんしていた。君のバランス感覚を評価してのことだ。だが、対中関係を重視する大統領が、中国語に堪能たんのうで、北京とのパイプをもつタッカーを登用した。まあ、三年前、君はまだ若かったしな。ああ、失礼。今でも十分若いぞ」

「三〇代最後の年ですが」

「大統領も、君でいいと言っている。それで、絵柄としては、だ。湯国慶を匿うよう強硬に主張したタッカーが詰め腹を切らされ、湯国慶の国外追放を主張してタッカーと対立した君が、ポストを得ると、明日の朝刊に載ることになる」

「私は別に、タッカーと対立なんてしていません。この問題自体、どちらかといえば國務省とFBI

の問題ですし」

「FBIでも、肅正しゆくせいの嵐あらしが吹き荒れることになる。國務省でもな。……それで、北京駐在大使を引き揚げるべきだと思うか？」

「まずは、中国政府の出方を見ませんと。ドラゴン・スカルルの国内活動を許した責任は、こちらにもあります。少なくとも、黙認した責任が、交通事故で合衆国市民が巻き添えになった時点で、もつと強硬に退去を主張することはできたわけですから」

「まるで、今朝のニューヨークタイムズの社説みたいだな。向こうに、何を求める？」

「国家主席の遺憾の意の表明を。速やかに大統領に電話を入れ、遺憾の意を表明し『自分は、ドラゴン・スカルルの暗躍に関して、聞かされていなかった。関係者を厳しく処罰しよばつする』と言わせる必要があります。それと同時に、中国大使館の要員

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。